

畿央大学

健康科学部

人間環境デザイン学科

第14回 卒業制作・論文作品集

卒業制作・論文作品集 14

畿央大学健康科学部
人間環境デザイン学科
2019

The 14th Graduation Works & Theses
Department of Environmental Design
Faculty of Health Sciences
Kio University

御挨拶

第14回卒業制作・論文作品集には、この春卒業する人間環境デザイン学科の卒業制作と論文の作品が収録されています。ここに収録されている作品は学内や大和高田さざんかホールでも展示されました。

この作品集に収録されている作品の写真や論文記録は、学生の皆さんの大学4年間の活動の、卒業時点での記念すべき結晶です。作品や論文が出来上がるまでの、苦労や仕上がった時の達成感は写真や記録が物語ってくれます。

学内で行われた講評会では、制作作品や論文ポスターを見ながら説明を受けました。表現技術の進展を踏まえた美しい作品や、伝統的な素材を新しい感性で取り扱った作品、新しいICT利用を意識した研究発表など、学生の皆さんが、それぞれ異なる美的感性や多様な視点を持っておられることを改めて知ることができました。

卒業される皆さんは、これからは社会の中で人の生活に関係するデザイン分野で活躍されることとなります。感性や知性をさらに磨き続け、成長されることを期待します。そして、建学の精神の「美をつくる」ことを実践し、豊かで輝かしい未来社会の構築に貢献してください。

何年後かに、この作品集を開くことがあれば、その時にはご自身の成長を振り返ると共に学友の顔を懐かしく思い返すことができると期待しています。

最後に、卒業までの間、個性を大切に学生一人ひとりをご指導いただいた先生方にお礼を申し上げますと共に、卒業後も引き続き良き関係を保っていただくことを願ってご挨拶とさせていただきます。

畿央大学 学長

冬木 正彦

卒業制作

- | | | | |
|----|-----|--------|-------------------------------------------|
| 8 | 学長賞 | 森本 美里 | tsuki AKARI |
| 12 | 優秀賞 | 菅野 真奈 | 大和もめん ～農民の知恵から生まれた大和のシンボル～ |
| 14 | 優秀賞 | 宮本 亜香里 | 春待つ手仕事 -花会式と造花- |
| 16 | | 青木 紗耶 | Cross ² - 諏訪湖のリゾートホテル- |
| 17 | | 植村 真帆 | こぶんげんかん |
| 18 | | 太秦 柚香里 | Weave Roof ～山城総合運動公園テニスコート計画～ |
| 19 | | 梅野 奈々 | 手づくりギャラリーたまひよっこ |
| 20 | | 江藤 公美 | Landscape bench |
| 21 | | 駕海 菜津子 | 生命美しく ～1964年のリバイバル～ |
| 22 | | 川口 華奈 | ぶどうの絵本「ぶどうかい」 |
| 23 | | 川本 浩輝 | KIO WAVE |
| 24 | | 楠本 直基 | 紺×藍 井べた糸を藍で染める |
| 25 | | 倉田 真琴 | 夢洲コンテンポラリーアートオークションギャラリー ～ずれる・開く・重なる～ |
| 26 | | 鈴木 詩織 | ゴッホの絵の世界 ～熊取町コミュニティーセンター計画～ |
| 27 | | 竹葉 海翔 | My Care Home |
| 28 | | 田中 沙紀 | JUNGLE VIEW ～旧八幡浜港埠頭に建つ展望台～ |
| 29 | | 田中 里佳 | 国立パレエ学校@岸和田 |
| 30 | | 筒井 健太 | ニルブルクリンク |
| 31 | | 鶴田 拓人 | 市木木綿 ～祖父母からの絶やさぬ伝統～ |
| 32 | | 中西 菜摘 | はじまりの駅 |
| 33 | | 中村 穂香 | 蛍火の風光 |
| 34 | | 中村 真帆乃 | 羊羊 |
| 35 | | 中屋 菜月 | Bride drawing by myself ～ウメノキゴケが彩るカラードレス～ |
| 36 | | 西垣 明花 | Escher Museum -無限への挑戦- |
| 37 | | 丹羽 美沙希 | 蝶花結び ～あなたと私を繋ぐ出会いの紐～ |
| 38 | | 長谷川 尚史 | 路の渦 |
| 39 | | 服部 七海 | 看者に寄り添う診療所 |
| 40 | | 福田 紗己 | 日常を彩る美 ～佐賀錦の輝きを持ってお茶会へ行こう～ |
| 41 | | 藤本 隼輝 | 「共」の空間が街並みをつくる |
| 42 | | 藤原 大輔 | 「終着駅」- 駅に降りると、そこは古都だった- |
| 43 | | 外尾 華奈子 | 飛鳥で暮らし、働く |
| 44 | | 堀之内 珠実 | 今と昔 ～かわる、かわらない～ |
| 45 | | 松本 侑伽 | 三休橋筋シェアハウス |

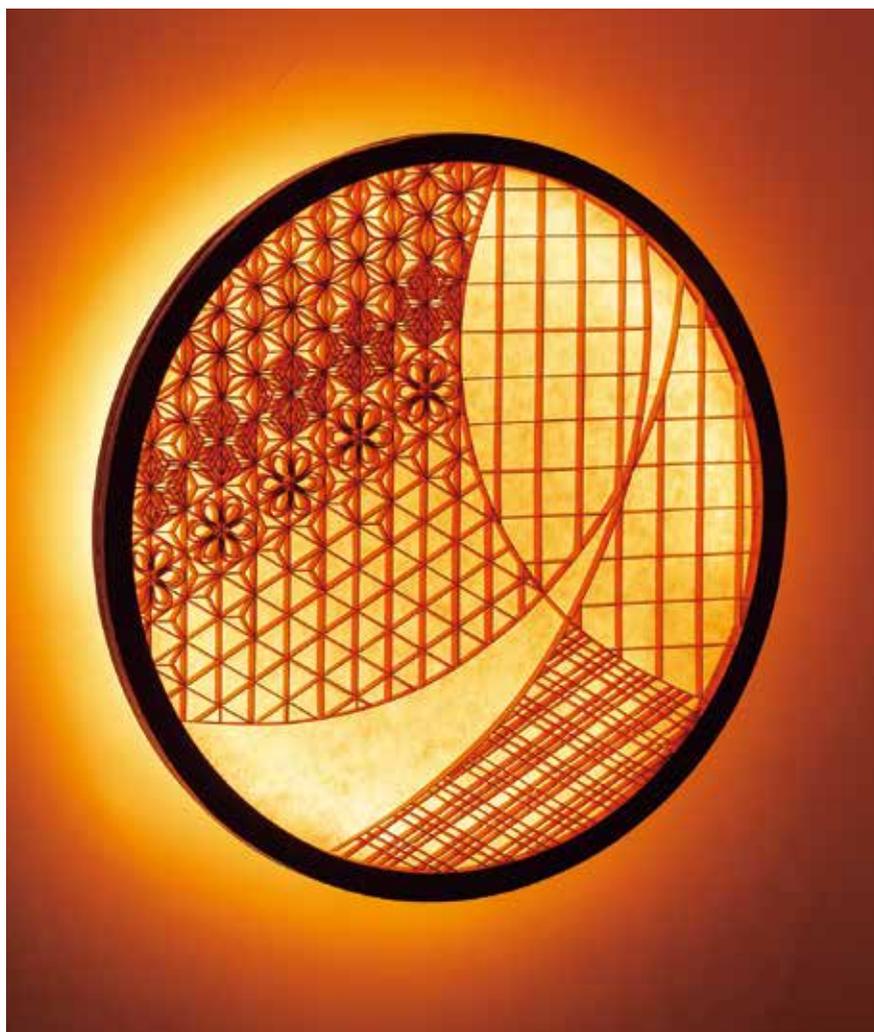
- 46 丸山 瑞季 HOTARU
- 47 村田 遼太郎 蘇れ、とんび ～現代版インヴァネスへの道程～
- 48 矢野 眞子 であい ～旧出合小学校リフロイニング建築による地域創生計画～
- 49 山下 和也 夢洲マリンターミナル
- 50 山田 晃穂 SENTOH
- 51 渡邊 沙弥香 百花繚乱 ～しあわせを運ぶ花車～

卒業論文

- 54 阿草 憲蔵 地域の魅力を楽しく学ぼう!!
甲斐 航大 広陵町立広陵北小学校におけるまちかたるた製作の活動報告
- 55 浅見 怜介 奈良での木を活かした家具づくり活動に関する研究
北松 寛大
- 56 足立 康一郎 カフェ空間の整備要件についての研究
藤本 美久
- 57 荒木 智哉 携帯型扇風機の使用実態と使用時の生理心理反応
田辺 拓暉
- 58 石田 蓮貴 奈良市立六条小学校の校区範囲における
3世代の外遊び場に関する研究
- 59 金谷 若奈 人の印象と香りに関する研究 - 青年・壮年男性を対象としたシーン別の検討 -
- 60 篠田 菫 住宅メーカーのホームページからのイメージ伝達効果
住川 笑里奈
- 61 白樫 大希 ライフコースごとの、女性の就業意識に関する研究
- 62 杉山 敬亮 照明の色温度が記憶に及ぼす影響
- 63 田口 功太郎 住民の主体的な観光まちづくり活動の動向について
高橋 勇希
竹雅 亮平
- 64 塚本 凌介 地方中核都市における小さな拠点づくりに関する研究
徳久 直人
- 65 寺田 真奈 色彩表現を用いたビクトグラムに関する研究
松岡 聖奈 - 東京2020オリンピックを例として -
- 66 土井 絵梨華 インターネットショッピングにおける商品の色名に関する研究
松井 梓 - トップスを中心に -
- 67 西田 茉央 大学生のトップスとボトムスを中心とした装いの
配色評価に関する研究
- 68 長谷川 真暉 小学校高学年の放課後の居場所と保護者の認識の違いについての研究
- 真美ヶ丘第一小学校を事例として -
- 69 藤江 誠 箸尾教行寺における「竹緑台」の使われ方と利用実態に関する研究
- 70 古市 桃子 マンションの共用スペースにおける学童保育の活用及び
コンシェルジュと住民の関わり
- 71 吉田 浩樹 休憩の取り方が作業負担や成績に与える影響
- 72 制作風景 / 講評会風景
- 78 講評

卒業制作

Works

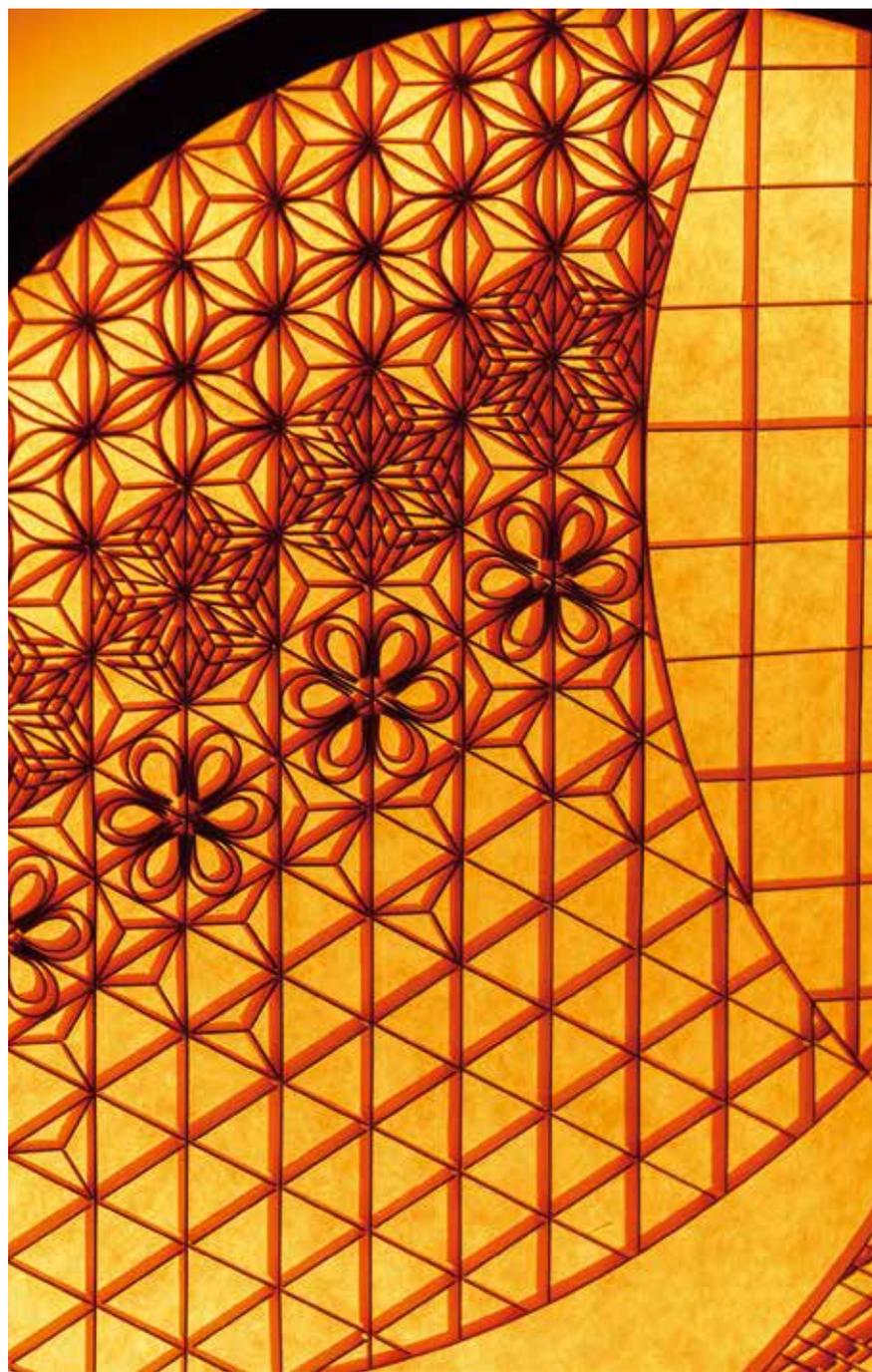


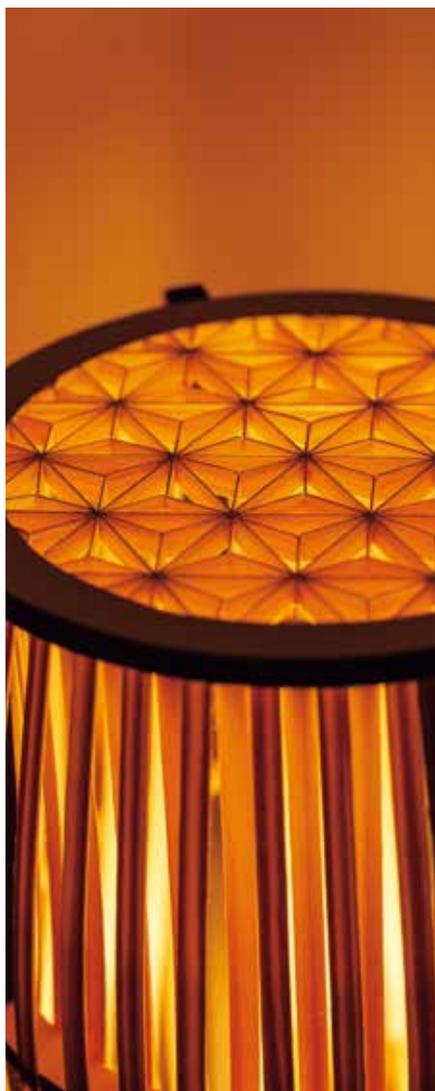
tsuki AKARI

森本 美里
Misato Morimoto

加藤ゼミ

家具の仕上げ材として使われる突板は用途の多様化が難しい。
突板を美しく見せる可能性や新しい使い方を提案するため、奈良が誇る吉野材を使って
「組・編・継」3つのテーマの照明器具の製作に取り組んだ。





受賞のことば

学長賞という光栄な賞をいただき、誠にありがとうございます。

作り上げた作品が自分の納得のいく形で終えることができ、大変嬉しく思います。

制作の中で迷い、苦しむこともありましたが、この4年間での様々な経験が作品を完成へと導いてくれ、まさに畿央大学での学びの集大成であったと感じています。

そして、何よりこの制作の中で考え、挑戦した時間こそが私にとって大きな財産であり、貴重な経験となりました。

本当にありがとうございました。





大和もめん
～農民の知恵から生まれた大和のシンボル～

菅野 真奈
Mana Kanno

村田ゼミ

奈良盆地の水不足対策から生まれた「大和もめん」
そして、その綿を用いた織物で、かつて全国的に有名だった「大和絁」
今回は綿から糸を紡ぎ、藍で染めて織り、大和絁を再現した子ども浴衣を制作。
奈良の素敵な産物を、ひとりでも多くの人に覚えてほしい。





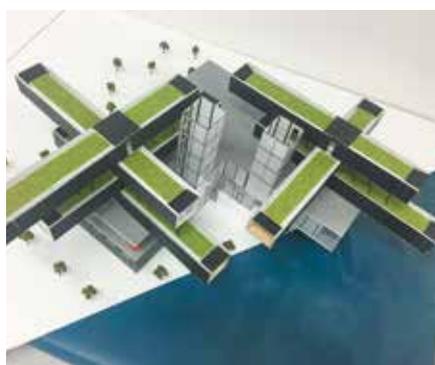
春待つ手仕事 はなえしき つくりばな
— 花会式と造花 —

宮本 亜香里
Akari Miyamoto

村田ゼミ

薬師寺の修二会 花会式の造花を100年以上守り継ぐ増田家。
その花づくりに約半年間密着し、見て・聞いて・体験したことを冊子にまとめました。
この1冊が、今日まで受け継がれる伝統を知るきっかけとなることを願っています。





Cross² - 諏訪湖のリゾートホテル -

青木 紗耶
Saya Aoki

加藤ゼミ

陽が昇りキラキラした水面をパチリ。外灯が光り輝く瞬間をパチリ。

四季によっても様々な色を見せてくれる諏訪湖。

その畔に建つホテル。

東西南北4方向と面する空間で、自然を感じながら自分の好きな風景を見つめ、日々の疲れを癒す場所。



こふんげんかん

植村 真帆
Maho Uemura

藤井ゼミ

世界遺産に登録された古市古墳群。

古墳群の観光案内所を道明寺駅直結、石川堤防内に計画し、
羽曳野・藤井寺の観光業発展と古墳文化継承を目指す。

知識があれば古墳は面白い。

人はここで古墳を学び、古墳を感じ、古墳を知って、この街に出掛ける。



Weave Roof ～山城総合運動公園テニスコート計画～

太秦 柚香里
Yukari Uzumasa

加藤ゼミ

子ども連れが過ごしやすいテニスコートを計画。

屋根は、木製のテニスラケットとガットをイメージし、屋根付きのテニスコートにした。

建物の中にはカフェスペースもあり、ゆっくり観戦ができる。



手づくりギャラリーたまひよっこ

梅野 奈々
Nana Umeno

陳ゼミ

明日香村での独立を目指す若手クリエイターに向けて、経営を学ぶ実践の場として作品展示・販売のためのギャラリーを計画。作家の卵を孵し 育む場となる「手づくり市」を開催し、若者の活力でにぎわいを創出する。



Landscape bench

江藤 公美
Kumi Eto

加藤ゼミ

木のベンチが公園の環境を華やかに変える。
角材が連続し、流れるように自然と融合するランドスケープベンチ。



生命美しく ～1964年のリバイバル～

鴛海 菜津子
Natsuko Oshiumi

村田ゼミ

今年(2019年)は東京オリンピック。葛の染色と蚕から育てた絹を用い、第1回東京オリンピック当時に流行していた服装を再現した。何度も葛を煮だしてようやく辿り着いた、この「色」がこだわりの。葛の生命力や蚕の生命へ感謝する気持ちを作品に込めた。



ぶどうの絵本「ぶどうかい」

川口 華奈
Kana Kawaguchi

加藤ゼミ

小さな子どもから大人まで農業に興味を持ってもらう為、
地元のぶどう農園をモデルに、「ぶどう農家の声をカタチにした絵本」を提案しました。
季節を通し、自然がもたらす恵みや脅威の中で、成長していくぶどうや植物たちの生命力を描いています。



KIO WAVE

川本 浩輝
Hiroki Kawamoto

三井田ゼミ

畿央大学に四年間在学し心を落ち着かせる空間が少ないと感じた
同時に学生が最も利用するであろうC棟とL棟間が全く利用されてない状況である
新たな空間を加えることでその空間に留まらず大学全体の雰囲気が変わるような憩いの場を計画する。

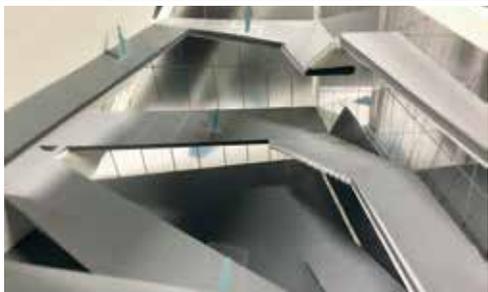


紺×藍 井べた糸を藍で染める

楠本 直基
Naoki Kusumoto

村田ゼミ

江戸時代に栄えた大和木綿、これを復活させた奈良さくらコットン。
手作業で育てられた綿を使い、紡ぎ、染め、織り、縫製まですべて手作業で紺紺の浴衣を作り上げました。

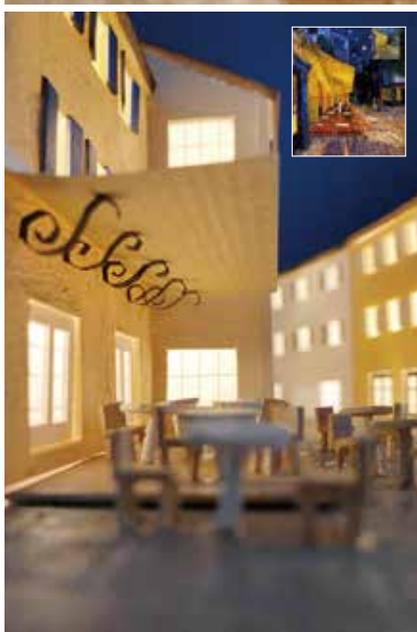
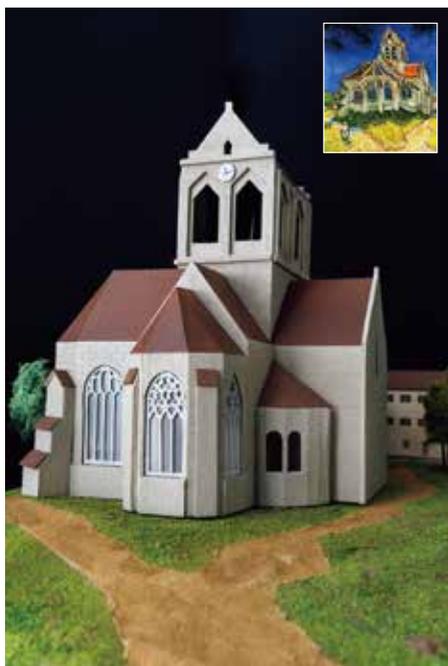


夢洲コンテンポラリーアートオークションギャラリー
～ずれる・開く・重なる～

倉田 真琴
Makoto Kurata

藤井ゼミ

世界に誇る現代美術（コンテンポラリーアート）作家が多く存在する日本。
しかしその作品の多くが海外へ流出している。
そこで、専用の展示はもちろんオークションなどのイベントも可能な美術館を計画する。



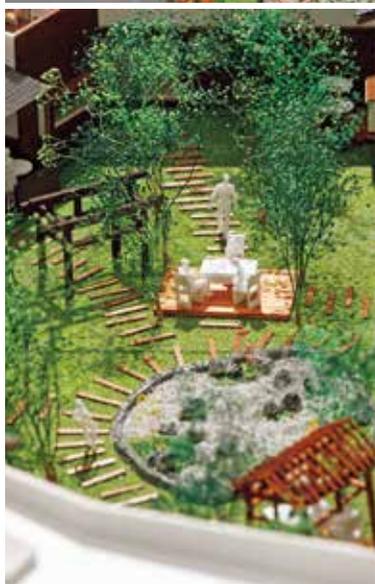
ゴッホの絵の世界
～熊取町コミュニティーセンター計画～

鈴木 詩織
Shiori Suzuki

藤井ゼミ

熊取町にある学童施設4つをすべてまとめた大型学童保育施設。
児童だけでなく地域の人の憩いの場所となる空間をつくりだす。
ゴッホが描いた絵画のシーンを建築で表現することでゴッホの絵の中に入ったかのような空間をつくりだす。

掲載している絵画は
<https://g-sozai.com/sozai/779.html>
jun-gloriosa.cocolog-nifty.com/blog/2015/06/post-e1b4.html
www.art-library.com/gogh/arles-bridge.html より引用させていただきました。

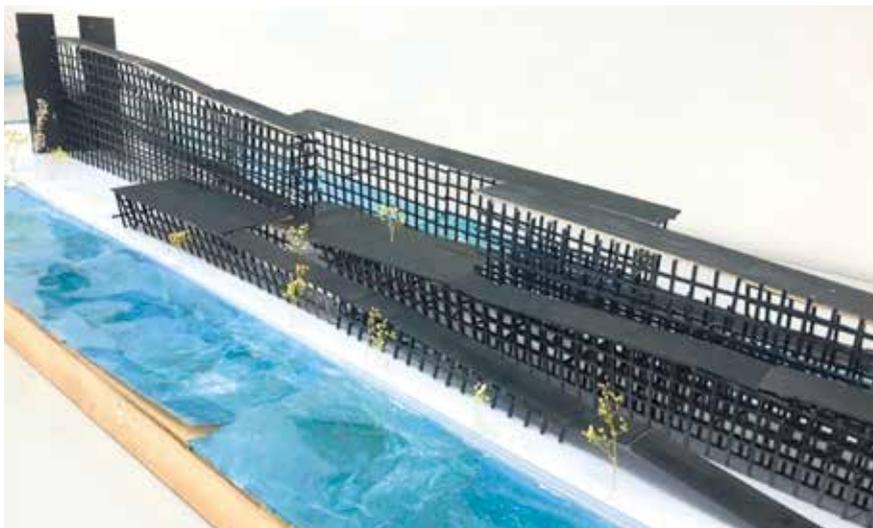


My Care Home

竹葉 海翔
Kaito Takeba

三井田ゼミ

老人ホーム・ケアハウスのイメージを変えたい。
自分は施設で暮らしているんだ…ではなく、
ここが私の新しい家なんだ!と感じ取ってほしい。
ここはケアを兼ね備えた新しいケアホームのカタチ。



JUNGLE VIEW
～旧八幡浜港埠頭に建つ展望台～

田中 沙紀
Saki Tanaka

加藤ゼミ

海と山、自然に囲まれた港町・愛媛県八幡浜市

その景色を一望でき、座ったり上ったり…まるでJungle gymのように楽しめる場に。
きっと訪れる人々を魅了し、そして癒しを与えてくれるだろう…。



国立バレエ学校@岸和田

田中 里佳
Rika Tanaka

藤井ゼミ

クラシックバレエを学ぶ人のために、学校や舞台、寮、製作工場など
その必要な用途をすべて含んだ建築物を設計しようと考えた。
建築全体を貫くプロムナードがバレエを踊っている姿を抽象的に表現しており、
「くるみ割り人形」のワンシーンを表現した大階段へと続いている。



ニュルブルクリンク

筒井 健太
Kenta Tsutsui

三井田セミ

商業と保育をリンクさせる。

ここはテナントビルが並ぶ三宮駅前の交差点、そこに5階分の円形の道が5つのビルを結ぶ。
利便性を高め、円に接する外階段とビル内の階段により、2階以上の保育園でも2方向避難が容易になる。



市木木綿 ～祖父母からの絶やさぬ伝統～

鶴田 拓人
Takuto Tsuruta

村田ゼミ

今回私の祖父母が生業としていた「市木木綿」の再現を試みた。
使用する経糸が単糸で切れやすいことに苦労したが、
経糸の本数や自分で紡いだ糸との組み合わせをすることで解決した。
しなやかでかつ丈夫、縞柄とチェック柄の生地を織り、
デザインにも個性を活かし納得のいく作品に仕上げた。



はじまりの駅

中西 菜摘
Natsumi Nakanishi

三井田セミ

サイクリストの拠点となるようなサイクリストのための道の駅を提案する。
ここでは様々なサイクルフレンドリーな設備を提供する。
日常を抜け出しライドする楽しみがここからはじまる。



蛍火の風光

中村 穂香

Honoka Nakamura

村田ゼミ

「夏の夕暮れ、蛍の舞う水辺」をイメージした浴衣。

染料は繰り返し染めた中から「かりやす×ブルーベリー×ログウッド」を選んだ。

小雨に映える美しい自然を切り取ったような浴衣は4年間の軌跡。



めいめい
羊羊

中村 眞帆乃
Mahono Nakamura

村田ゼミ

羊のジョージの毛を刈り、綺麗に洗って縮充という特性を活かしコートと鞆を作った。
ニードルを駆使し、肩、袖ぐり、脇の縫い目をなくし、こだわりの羊毛刺繍を施した作品に仕上げた。

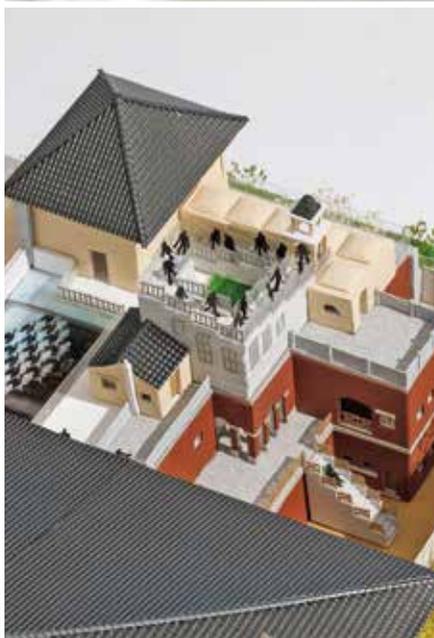
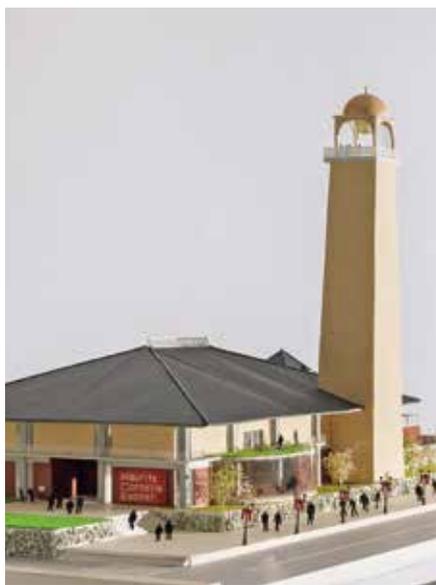


Bride drawing by myself
～ウメノキゴケが彩るカラードレス～

中屋 菜月
Natsuki Nakaya

村田ゼミ

結婚式で花嫁を美しく引き立たせる、こだわりをたくさん詰め込んだ作品です。授業やゼミで学んだ染め物の技法を活かしてウメノキゴケでカラードレスにし、4年間で培った縫製技術でドレスデザインを考案した4年間の集大成です。



Escher Museum - 無限への挑戦 -

西垣 明花
Haruka Nishigaki

加藤ゼミ

M.C. エッシャー。彼の代表作『上昇と下降』に描かれた建物の屋上には“無限階段”があり人が上昇と下降を永遠に続けているように見える。

この階段、描くことは出来るが三次元では存在しえないようだ。

本当に三次元で表現出来ないのだろうか。

そのような些細な疑問から、たまし絵の巨匠エッシャーが遺した無限の謎に迫った。

“環境展示”という方法で視点のトリックを生かした新感覚美術館。



蝶花結び ～あなたと私を繋ぐ出会いの紐～

丹羽 美沙希
Misaki Niwa

村田ゼミ

人と人との出会いと別れを紐の結びに例え、結びで出会いを表現し、ほどけることで別れを表現。
そして立体刺繍のスイートピーの蝶のように羽ばたく花びらや花言葉で
共に過ごした思い出や新たな出会いを表現しました。



路の渦

長谷川 尚史
Takafumi Hasegawa

藤井ゼミ

この地は、高速道路と鉄道の交通結節点である。
自動車・バス・電車で訪れた人々は自転車に乗り換え、
観光地から自家用車を排除し渋滞緩和、環境向上に繋がる。
渦のように集まり、渦のように広がる、奈良観光の拠点となる。



看者に寄り添う診療所

服部 七海
Nanami Hattori

三井田ゼミ

暗くて冷たい。そんな診療所の印象をなくしたい、前向きに病気と向き合える空間を作りたいと思い卒業制作に取り組みました。自分なりの理想の診療所を設計することができました。

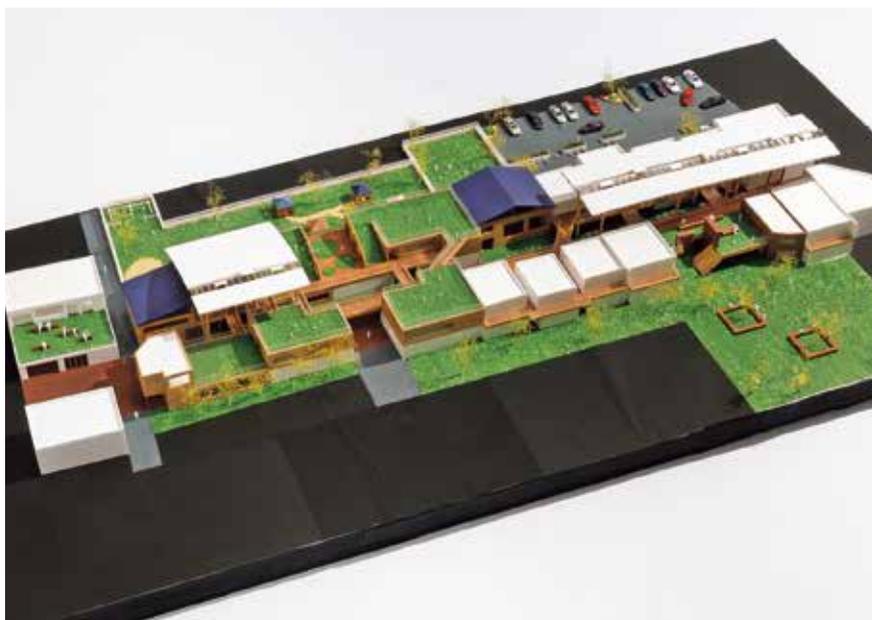


日常を彩る美
～佐賀錦の輝きを持ってお茶会へ行こう～

福田 紗己
Saki Fukuda

村田セミ

礼装では欠かせない存在の佐賀錦。
しかし日常生活で目にする機会はほとんどない。
そこで私は異素材を組み合わせて普段使いのできるバッグと懐紙入れを制作。
佐賀錦の美しさを日常で感じられる作品として形にした。

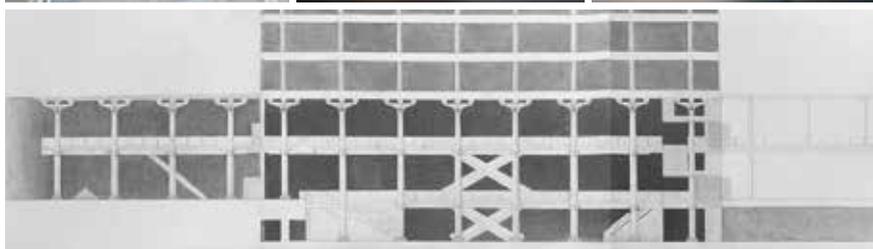


「共」の空間が街並みをつくる

藤本 隼輝
Toshiki Fujimoto

三井田ゼミ

今、シャッター街が社会問題になっている。
この、さざんかストリートも例外ではない。
商店街の復興は、住宅街としての魅力を高めることから始める必要があるだろう。
そこで、かつて商店街が形成していた 道路（公共）・アーケード（共有）・店、施設（私）の再構成を提案したい。



「終着駅」 - 駅に降りると、そこは古都だった -

藤原 大輔
Daisuke Fujiwara

三井田セミ

近鉄奈良駅は奈良の代表的な駅であるが、あまり個性がない。
列柱のある大空間によって、
訪れた人々の思い出に残る古都に相応しい駅に。

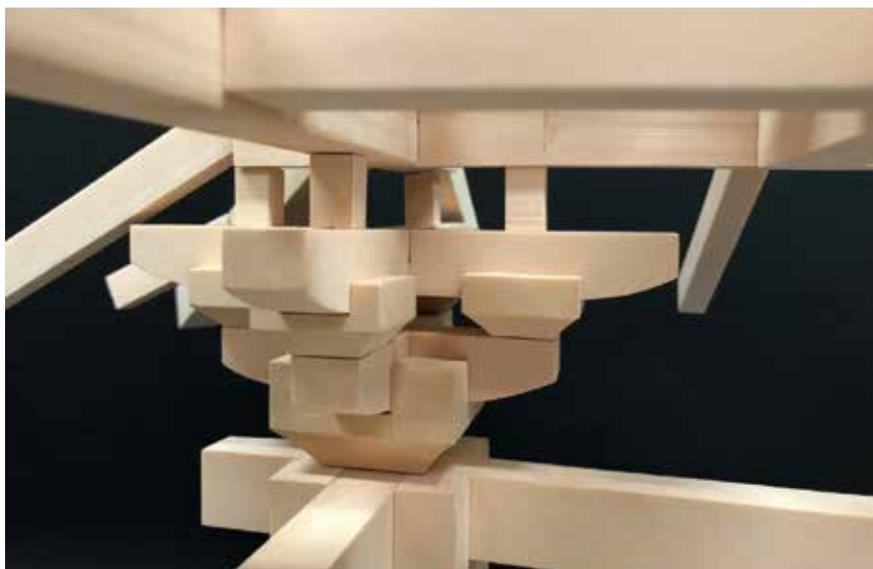


飛鳥で暮らし、働く

外尾 華奈子
Kanako Hokao

陳ゼミ

明日香村で近隣住民のための店と住宅づくり。
いくつも商店が集まることで全体で1つのショッピングモールのような所になり、
それぞれは小さな店だからお店の人と顔見知りになり信頼関係が生まれる。
生活に不便を感じる方や移住者も多いこの村で、人のつながりを大切にしながら
住民の生活の拠点になる場所を目指しました。



今と昔 ～わかる、かわらない～

堀之内 珠実
Tamami Horinouchi

三井田セミ

昔ながらのお堂を、用途を変え「集会所」に
伝統工法で作られる斗拱の形を変える、全面ガラス張りの建築と組み合わせ、
昔と今を混合させた。

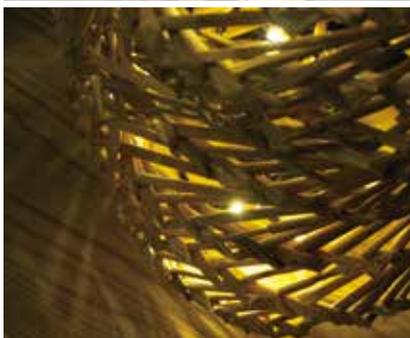


三休橋筋シェアハウス

松本 侑伽
Yuka Matsumoto

藤井ゼミ

憧れの都心住まい...
レンガ造りの建物や、瓦斯灯に梅壇の街路樹がならぶ三休橋筋。
この街で暮らしたい。
でも都会の喧騒からは離れたいし、独房のようなワンルームは嫌。
それに独りで住むのは心細い。
そんな思いを込めた、シェアハウスの提案。



HOTARU

丸山 瑞季
Mizuki Maruyama

加藤ゼミ

日本の童謡で歌い親しまれたり、亡くなった人の魂の生まれ変わりと考えられている「蛍の光」。日本の原風景ともいえるこの儚い光を活かした照明を制作したいと思い、生きている自然の光である蛍を入れておく虫かごの蛍籠をモチーフにしようと考えました。



蘇れ、とんび ～現代版インヴァネスへの道程～

村田 遼太郎
Ryotaro Murata

村田ゼミ

艶やかなとんびコートが、今では廃れてしまったことに寂しさを感じた。
そこで私は本コートの普及過程、様々な呼称の区別、衰退の理由といった歴史的背景について調査し、
コートの形状、パターンの考察を行い、現代にとんびを蘇らせた。



であい
～旧出合小学校 リファイニング建築による地域創生計画～

矢野 真子
Mako Yano

加藤ゼミ

廃校舎となった旧出合小学校周辺に点在する観光地や自然に溢れた環境へのアクセスをいかし、
'体験型宿泊施設'としての活用を提案する。
地域住民との交流や豊かな自然や文化に触れ、この地の将来の可能性を知ってもらうことが
地方創生へとつながる。



夢洲マリンターミナル

山下 和也

Kazuya Yamashita

藤井ゼミ

EXPO2020・IR・万博跡地・・・

夢洲は、世界から大阪の新しい玄関口となるべく成長する。

陸路は大阪メトロ延伸や橋の拡張がすでに予定されている。

加えて関西空港や神戸空港から夢洲への旅客船のターミナル計画を考えた。



SENTOH

山田 晃穂
Akiho Yamada

加藤ゼミ

心も体も癒す非日常的空間として親しまれてきた銭湯文化。
♾の文字を連想させる外観で銭湯に馴染みのない世代にも興味を持ってもらいたい。
白黒の浴場、男女混合のサウナ室、野外プールなど、新しい銭湯の形を提案する。



百花繚乱 ～しあわせを運ぶ花車～

渡邊 沙弥香
Sayaka Watanabe

村田ゼミ

独特の風合いや重厚感のある文化刺繍で、“しあわせ”を意味する古典柄である花車をジャケットと鞆を制作し、刺繍しました。そして花車には、牡丹や雛菊、梅の花など縁起のいい花言葉をもつ花を乗せ、持ち主のおまもりになるように…と願いを込めました。

卒業論文

Theses



地域の魅力を楽しく学ぼう!! 広陵町立広陵北小学校におけるまちなか製作の活動報告

阿草 憲蔵
Kenzo Agusa

甲斐 航大
Kouta Kai

清水ゼミ

<活動の目的>

近年、人口減少や少子高齢化に伴い、地域のつなりの希薄化が全国的な課題となっている。今回の活動地である広陵北小学校区も例外ではない。ここ数年人口は減少傾向にあり、この6年間で163人減少している。本活動地のような旧村では地域住民間での結束力が強く、地域への愛着も深く根付いていると考えられてきた。しかし、広陵北小学校区では人口減少や高齢化に伴い、小学校と地域間の関係性が希薄化し始めていることが予備調査で明らかとなった。そこで本活動では、小学校と地域住民とが協力して地域の伝統や魅力をまとめることで、新たにつながりを持つきっかけをつくり、小学校と地域住民とがつながるためには、何が重要かを明らかにする。

<方法>

まず文献調査により国内の動向や活動地の現状を把握する。次に小学校と交流の無かった地域住民とがつながる仕組みとして、広陵北小学校5年生を対象に身近な地域の魅力を地域住民から学ぶ機会を与え、「かると」としてまとめた。それらの運営を参与観察する。

<まとめ>

①企画、計画段階

今回の取り組みのビジョンを明確にし、一年の大まかなスケジュールを決定したが、小学校の授業の進捗を考慮すると4月までに明確な年間

スケジュールの作成が好ましい。

②準備段階

本格的な活動に入るにあたり、事前の打ち合わせや各組織への協力を依頼した。住民を交えた活動組織の形成におよそ半年を要した。今回は大学生がゲストティーチャーの手配を行ったことにより小学校教員の負担が大幅に減少したがこのような活動を小学校教員のみで実施することは困難であるため、何らかのサポートが必要不可欠であることが分かった。

③学内活動～製作段階

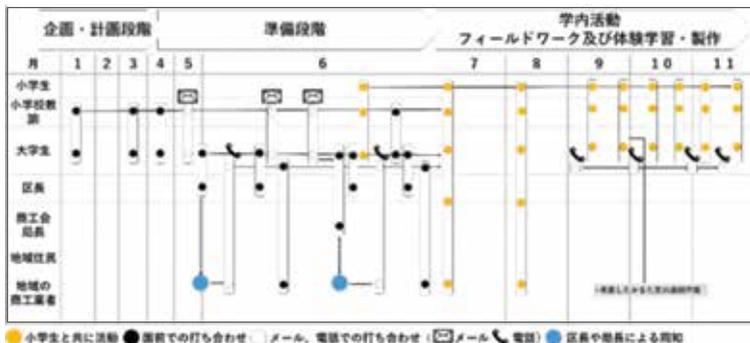
実際に地域住民・地域の商工業者をゲストティーチャーとして招き、小学生に広陵町についての話を地域住民がおこなった。ここで収集した文化をかるた製作に反映した。今回は製作段階に地域住民の関わりをとらなかったが、この段階においても何らかの形で参加できる仕組みが必要だったと考える。

本活動では、かるた製作を通して地域住民と小学校が新たな交流をつくることが出来た。完成したかるたは、地域の団体に寄付し利用を促すことで、多くの住民に地域の魅力を発信する。今回の活動を通じて地域と小学校との新たなつながりが生まれた。このつながりを生かして次の活動につながることを望んでいる。

謝辞:

本活動を実施するにあたり、協力してくださった地域住民の皆様、広陵町立広陵北小学校の皆様へ心から感謝申し上げます。

表1 活動段階別フロー





奈良での木を活かした 家具づくり活動に関する研究

浅見 怜介
Ryouyusuke Asami

北松 寛大
Kanta Kitamatsu

西山ゼミ

<背景と目的>

奈良県では約500年前から林業が盛んであったが、現在では、林業就業者の減少、林業就業者の高齢化、木材価格の低下から奈良の林業は危機的状況にある。一方、その資源を活かして川上村や下市町では家具づくりの取り組みがみられる。しかしながら、奈良の木のことも、奈良で木を活かした家具づくり活動のことも広くは知られていないとされている。

そこで本論は、奈良の林業の歴史と実態を踏まえ、奈良県内のどの地でどのような家具づくりが行われているかなどについて現状を把握することを目的とする。

<調査方法>

(1) 事前調査

現状把握の調査に向け、情報を得るために事前調査を行った。奈良県吉野郡東吉野村にある維鶴木工において、奈良で木を使った家具づくりについて自由に意見を述べてもらった。結果、奈良で木を活かした家具づくりの現状を明らかにするためには、奈良の林業と各工房の実態を把握することが必要だと分かった。

(2) 文献調査

奈良の林業について整理した。

(3) 現地調査およびヒヤリング調査

奈良で木を活かした家具づくりの活動について各工房で視察とヒヤリングを行った。

(4) アンケート調査

ヒヤリング内容に対する評価と家具づくりの環境に対する総合評価を得るアンケートを実施した。

<奈良での家具づくりの実態把握>

木材について、吉野杉はほとんどの工房で使われており、吉野材は手に入りやすく、優良材であるとされていた。材料の入手法は製材所から仕入れることが多く、価格は高いとされていたが、材質はそれ以上に価値があるとされていた。

技術・販売について、木工技術を身に付ける方法は専門学校によるものが多く、以前から家具づくりに関わることを目指していたとされていた。技術伝

達とはほとんどの工房で取り組みがみられ、現在未活動の工房も今後取り組むとされていた。木工技術の伝達活動に対しては、どの工房でも意欲がみられた。

販売経路について、地域別でみると奈良県南東部では百貨店や専門店といった販売ルートがあったのに対し、北部ではこのような販売ルートが認められなかった。

生活について、交通アクセスは、すべての工房で車がないと不便とされていた。電気・水道・ガスや商業施設などの生活基盤は整っているとされていたものの大きな病院や学校が遠いとされていた。

コミュニティについては、同じ市町村の工房間で交流があるとされていた。仕事の共有や分担は、同じ市町村の場合のみみられた。一方、奈良県外の工房との交流については、ほとんどみられず、県内だけでの交流が多かったのに対しこれらの交流に満足していた。

<現状に対する評価>

多くの工房が吉野材を入手しやすいとしていたのに対し、木材調達の現状に十分な満足が示されていた。技術の伝達については実際に活動を行っている工房が多くみられたのに対し、技術伝達の現状に対しては不満が示されていた。交通アクセスや学校や病院が不便とされていたのに対しどれも満足が示され、不便ながらもその不便さを受け入れていた。

<まとめ>

奈良の林業は危機的状況にあるものの、木材は高価ながらもその材質は優良であると評価され、広くものづくりに使われていた。

奈良での家具づくりに関する知識や技術の向上は活動を通して図られており、それらの伝達については、多くの工房で活動が認められ、現在未活動の工房も今後の取り組みを考えており、どこも意欲的であった。

生活の基盤となる施設は整備されている一方、大きな病院などの施設の整備の不十分さには不満が示されていた。



カフェ空間の整備要件についての研究

足立 康一郎
Kouichiro Adachi

藤本 美久
Miku Fujimoto

西山ゼミ

<背景と目的>

近年インスタグラムの普及により、若者たちは写真をSNSに載せることを意識して飲食店に立ち寄ることも少なくない。

飲食店はそんな若者たちをターゲットにして撮影用の壁や照明を用意し、インスタグラムによるクチコミ効果を狙っている、ともされている。

そこで本論では、飲食店の中でも広く取り上げられているカフェのインテリアデザインに注目し、その空間を印象付ける要素を把握することを目的とする。

<カフェ空間の分類>

インスタグラムから、カフェのインテリアデザインの写真150件を選出した。飲食店の店舗設計、料理店の資料集及び一般的なインテリア空間の構成法を参考に、「室内の仕上げ材」「ウィンドウトリートメント」「照明」「家具」「インテリア・小物」「照明」の6つの構成要素を導出した。これらに基づき、各写真について、KJ法を応用し、イメージの似通ったものを分類した。さらに、分類したものについて、先の6つの構成要素のうち、その空間に強い印象を与えているものを選出し、これを集計して、その空間に最も強い影響を及ぼしている構成要素を抽出した。その最も強い影響を及ぼしている構成要素の特徴を元に、再びKJ法を応用してイメージの似通ったものを整理したところ、選出した150件の写真は5つのグループに分けることが出来た。各グループについて、その構成要素の特徴を文献に照らし合わせ、「ナチュラル」「カントリー」「モダン」「和風」「エレガンス」とインテリアスタイルを命名した。

<実際のカフェ空間に対する評価>

調査対象を選定する為、インスタグラムでカフェのインテリアスタイルの評価を見た。結果、評価の高かったのは「カントリー」であった。そこで「カントリー」のスタイルをもった

カフェのインテリア空間を調査対象とすることとし、その空間の評価を得るアンケートを、スタッフにより調査票を配布し、その場で回収する方法で実施した。調査内容は、回答者の属性、及び、先に示した6つの構成要素に関する質問である。得られた回答結果は、単純集計により、美しさと機能の2つの側面から評価の特徴をみた。また、重回帰分析を行い、満足度に影響を与える要因をみた。

結果、調査対象のカフェ空間の環境にはほとんどの人が満足しており、総じて機能より美しさに対する満足度が高かった。美しさに関しては色調が、機能に関しては床の歩きやすさや天井の高さが評価されていた。また、利用客の満足度に対しては、色による安らぎ感、家具の材質と形状によるウィンドウトリートメントの光調整と遮蔽、天井の仕上げによる照明の明視が重視されており、特に利用客は、色によって得られる寛ぎの時間を重視していた。



図1 カフェ平面図



写真1 カフェ内観

<まとめ>

- (1) 一般的な飲食店の空間計画を整理してカフェ空間を構成する要素として、室内の仕上げ材、ウィンドウトリートメント、照明、家具、インテリア・小物、色調の6つを導き出した。
- (2) カフェ空間には「ナチュラル」「カントリー」「モダン」「和風」「エレガンス」の5つのインテリアスタイルがみられた。
- (3) 「カントリースタイル」を採用した実際のカフェ空間のインテリアデザインに対する利用者の満足度は極めて高く、美しさでは色調が、機能では床の歩きやすさや天井の高さが高く評価されていた。



携帯型扇風機の使用実態と使用時の生理心理反応

荒木 智哉
Tomoya Araki

田辺 拓暉
Hiroki Tanabe

東ゼミ

<目的>

夏季における気温上昇による熱中症の増加に伴い、労働現場では小型扇風機を内蔵したクールベストの普及が進んでいる。また、近年では若者を中心に手軽な暑熱対策として携帯型扇風機を使用する人が増加傾向にある。そこで本研究では、大学生を対象として携帯型扇風機の認知度や使用実態について調査するとともに、3種類の携帯型扇風機を選定し、使用時の生理心理反応を測定してそれらの特徴を明らかにすることを目的とする。

<方法>

1. アンケート調査

調査対象は奈良県内の共学大学生100名と兵庫県内の女子大学生100名で、質問紙を直接配布・回収した。有効回収数は198部であった。主な調査項目は、携帯型扇風機の認知、所有状況、購入時期、使用目的・方法、今後の購入希望等で、調査期間は2019年9月～10月である。

2. 被験者実験

被験者は研究への同意を得た男子大学生7名で、室内において携帯型扇風機3種(図1)を使用してもらい、以下の生理反応を測定した。

- ・測定項目：皮膚温8点(前額・首・胸・上腕・前腕・背中・大腿・下腿)、衣服内・環境温湿度、主観申告(温冷感・快適感等)
- ・測定方法：携帯型扇風機の使用順序はランダとした。温度・湿度は小型測定器にて30秒間隔で自動計測した。
- ・測定条件：順応を30分(エアコン28℃設定)、その後廊下にて扇風機を使用し、座位で10分(30℃程度)、歩行10分(30℃程度)の後、休憩10分(28℃設定)とし、主観申告は各条件終了時に行った。実験時の環境変動は僅かであった。着衣は半袖・半ズボンとした。実験期間は2019年8月～9月中旬である。



ハンド型 肩掛け型 背中型

図1 対象とした携帯型扇風機

<まとめ>

アンケートの結果、携帯型扇風機の認知度は100%で、普及率は5割弱であった。その9割以上がハンド型を所有しており、購入時期はこの1～2年が大半を占めた。女性、汗のかきやすい体質、暑がりの場合に所有率が有意に高いことが確認された。現在、携帯型扇風機を所有していない人のうち7割強が今後の購入を希望しており、若者を中心に携帯型扇風機の普及が進むと考えられた。

被験者実験における皮膚温測定結果では、ハンド型は顔周辺に向けて使用されていたため、前額と首の皮膚温上昇を、背中型は背中中の皮膚温上昇を抑制していた。しかし、背中型は歩行時に比べて座位条件では着衣が密着して気流が流れにくい場合もあり、皮膚温や評価に影響したと考えられた。顔や首の温冷感や快適感では、ハンド型より肩掛け型において評価が高かった。今回はファンの音や連続使用による被験者への負担を考慮し、風量を「弱」設定で実験を行ったため、皮膚温の低下より左右からの首元への気流が快適感や温冷感に影響したと考えられた。

以上より、本実験条件の範囲においては、座位では普及率の高いハンド型、歩行時には背中型が気流のあたる部位の皮膚温上昇を抑制し、肩掛け型は座位、歩行時ともに快適感が得られる傾向を確認した。また、快適感により暑熱対策を怠ることがないように留意する必要性も示唆された。

謝辞：
暑い中実験にご協力いただいた被験者の皆様に御礼申し上げます。



人の印象と香りに関する研究 - 青年・壮年男性を対象としたシーン別の検討 -

金谷 若奈
Wakana Kanetani

東ゼミ

<目的>

近年、日常生活において、香りは不快なおいに消臭・マスクングするだけでなく、個性を表すためのツールになっている。そこで本研究では、男性を対象とし、年齢や生活シーンに加えその人自身が持つ印象によって好ましいと感じる香りの傾向を調査することを目的とする。

<方法>

1. 意識調査

研究への同意を得た大学生被験者24名を対象とし、香りやにおいに対する意識を把握するための予備調査を質問紙法により行った。主な調査項目は、香りやにおいに対して敏感か、他人や自身の香りが気になるかどうか等である。

2. 被験者実験

・香りの選定と印象評価

市販の男性用香料100種以上から印象の異なる香り6種(①~⑥)を選定した。香りをコットンボールに噴霧し、保存瓶に入れたものを試料とし、SD法による印象評価と因子分析により、それぞれの香りの特徴を整理・分類した。

・人物画像の選定と印象評価

年齢層と生活シーンを組み合わせた以下の4群に分類し、人物画像を収集した。

- ① 壮年層ビジネスシーン(スーツ)
- ② 青年層ビジネスシーン(スーツ)
- ③ 壮年層カジュアルシーン(普段着)
- ④ 青年層カジュアルシーン(普段着)

人物の印象に関する既往研究を参考に、アクティブかクールか、ワイルドかマイルドかという視点で、人物画像を整理し、①~④を各4パターンに分類した評価用のボードを作成した。人物画像のボードはSD法による印象評価と因子分析により、各特徴を整理した。

・人の印象に合う香りの選定

被験者に人物画像のボードを順不同で見てもらい、この人達に最も合うと思う香りを①~⑥より一つ選定してもらった。

実験は2019年10~11月に実施した。

<まとめ>

意識調査の結果、他人や自身の香りに対して敏感である、他人の香りを気にするという回答の割合は多いことが確認された。

被験者実験による香りの印象評価の結果は、表1に示す通りである。

表1 試料とした香りの印象評価

番号	メーカーによる香りの説明	被験者による印象
①	甘い・爽やか・ほろ甘い	やわらかい・すっきり・女性的
②	アタディブ・芳らしい	男性的・やや懐かしい・やや苦手・やや嫌い
③	知的・クール	すっきり・女性的・やや落ち着く・濃厚
④	大人・秋冬	濃厚・重い・ぼんやり・やや嫌い
⑤	複雑・自然	すっきり・ほろり・立体的・明るい・濃淡感がある
⑥	爽爽・力強い	男性的・軽い・やや地味

さらに、因子分析を行った結果、4つの因子が抽出され、第一因子を優美性因子、第二因子を清涼性因子、第三因子を活動性因子、第四因子を好感度因子と名付けた。

好ましいと選定された香りは、ビジネスシーンにおいて年齢層による有意な差がみられた。壮年層には男性的で、鈍く、地味で、暗いと評価され、活動性因子得点が低い⑥の香りが多く選ばれ、一方、青年層にはやわらかく、あたたかく、甘く、女性的と評価され、優美性因子得点の高い①の香りが多く選ばれた。また柑橘系のすっきりとした香りであり、清涼性因子得点の高い⑤の香りも、青年層において選ばれる割合が高かった。②、③、④の香りは、年齢層によらず一定の割合で選択される傾向があった。

生活シーンや人物の印象別にみた好ましい香りの選択傾向は若干異なっていたが、今回の実験では年齢層による影響のほうが大きい結果となり、年齢に応じた香りの選択が好ましいといえる。

今後は、香りの種類や評価対象、被験者の幅を広げたさらなる検討が望まれる。

謝辞:

ご協力頂いた被験者の皆様に御礼申し上げます。



住宅メーカーのホームページからの イメージ伝達効果

篠田 菖

Ayame Shinoda

住川 笑里奈

Erina Sumikawa

季ゼミ

<目的>

近年、インターネットの普及に伴い、情報化が進みパソコンやスマートフォンは今や生活に欠かせない通信手段となり、手軽に閲覧出来るウェブサイトの情報を参考にし物事の判断材料のひとつとするなど、生活の様々なシーンでウェブサイトの情報を多く活用している。そこで本研究では、画像情報のイメージ伝達効果を明らかにすることを目的とし、住宅メーカーのウェブサイトの中でもホームページの画像を用い、それぞれの住宅メーカーのイメージがどのように伝達されるのか、画像試料によって検討を行った。

<方法>

建築を専攻している大学生(20名)、その他の大学生(20名)、22歳以上の建築関係の仕事に就いている人(20名)、その他の仕事に就いている人(20名)の計80名に、事前調査にて抜粋した16枚の画像試料(図1)をスマートフォン(iPhoneXS)によりランダムに見せた。画像試料に関する20項目の形容詞を-2~+2の5段階評価のSD法により被験者実験を行った。

<まとめ>

社会人(その他)では、感情尺度の「居心地の良い」が大きく影響し、また「落ち着く」「親しみやすい」などの実用性を重視していることが明らかになった。一方、学生(建築)、学生(その他)、社会人(建築)では「好き」の感情尺度が大きく影響し、その中でも学生(その他)は、「美しい」「センスの良い」など、見た目の美しさ、煌びやかさを重視していることが明らかになった。学生(建築)と社会人(建築)では、「居心地が良い」が共通しており、建築を学んでいる人は学生、社会人問わず好みと居心地の良さの両方を重視していることが明らか

になった。しかし、社会人(建築)は学生(建築)より、居心地の良さに対する評価が高く、また「センスの良い」の感情尺度の影響も大きいことから、好みや居心地の良さ、センスの良さなどを経験と合わせて評価の判断材料としていと考えられる。



図1 画像資料

出典：積水ハイム、アキュラホーム、一条工務店、タマホーム、ミサワホーム、住友林業、ダイワハウス、クレバリーホーム、レオハウス、アイ工務店、旭化成へーベルハウスの各ホームページ



ライフコースごとの、女性の就業意識に関する研究

白樫 大希
Daiki Shirakashi

清水ゼミ

<研究の目的>

昨今、地域経済の原動力である中小企業の多くは人材不足に悩まされており、ダイバーシティマネジメントが重要視されている。中でも女性の就業は、2015年に女性活躍推進法が制定される等、重要な位置づけである。

一方、奈良県の女性の就業率は全国で最も低く、「働きたいが働けない女性」が多いことが明らかとなっている。

そこで本稿では、女性のキャリアに大きな影響を与えているといわれるライフコース(Life Course:以下LC)に着目し、LCを下記のように定義して、LCごとの就労意識や、求める支援について、明らかとすることを目的とした。

継続就業
コース
Continued
employment
Course
(以下CEC)

結婚・出産を経験しても、就業を継続。

再就職
コース
Reemployment
Course
(以下RC)

学卒後未就職、又は、結婚・出産を機に退職し、家事・育児が落ち着いてから就職。

専業主婦
コース
Full-time
housewife
Course
(以下FHC)

学卒後未就職、又は、結婚・出産を機に退職し、家事・育児に専念。

<方法>

調査対象	広陵町在住の25～74歳の女性
調査期間	令和元年11月28日～令和2年1月6日
調査方法	郵送配布及び直接配布
有効回答数/配布数	192/526人、有効回答率36.5%

<まとめ>

理想のLCは、CECが約3割、RCが約5割で、FHCを理想とする方は約1割であるのに対し、現実にCEC、RCを歩んでいる割合は、理想に比べてやや少なく、FHCを選択する女性は約2

割となっている。

(1)現実のLCごとの就業意識

CECでは、顕著に仕事に注力したいと考えている女性が多く見られ、RC、FHCの順に私生活に注力したいと考えている女性が多くなっている。一方で、FHCの回答者のうち、仕事はせずに私生活に専念したいと考えている女性は13%にとどまっており、多くの女性は、働きたいと考えていることが明らかとなった。

(2)現実のLCごとの求める就業支援

CECでは、「育児・介護休暇」、「夫の家事育児への参加」、「保育所等の施設の充実」等、「周囲による私生活へのサポート」を求めている。一方、RCにおいては、「フレックスタイムや短時間勤務」、「通勤に便利な職場」を求める割合が多く、「育児・介護休暇」、「保育所や児童クラブ等の施設の充実」を求める割合が少ないことから、周囲による私生活へのサポートは求めないが、仕事と私生活の両立が可能な働き方を求めていることが分かる。FHCでも、RCと同様の傾向が見られたが、「夫の理解や協力」を求める割合が多かった。このことから、実際に働いてから求めるものに意識が及ばず、その前の段階である、就職の支援として、特に夫への理解や協力を求めていることが分かる。

企業志向では、LCに関わらず、「企業規模はこだわらない」と回答している割合が多かったため、RC、FHCの方は、職住近接で、柔軟な対応が可能な地域中小企業への就業可能性が高いと考えられる。CECでは、「夫の家事育児への参加」、「保育所等の施設の充実」により、地域中小企業への就業可能性が考えられる。

今後は、中小企業へのアンケート調査等による、実現可能な就業支援・働き方の提供等を模索したい。

謝辞：

本研究に際し、広陵町内の住民の皆様、健康農業関係者の皆様、奈良県中小企業家同友会の皆様、広陵町商工会の皆様、広陵町役場の皆様には、アンケート調査の実施等にご協力頂き、深く御礼を申し上げ、感謝する次第です。



照明の色温度が記憶に及ぼす影響

杉山 敬亮
Keisuke Sugiyama

東ゼミ

<目的>

これまで経験的に、学習時の環境は記憶の定着度に影響していると感じていた。そのような中、照明の色温度が覚醒状態に影響を及ぼすという研究を知り、学習をより効果的に行うことができる照明環境について、被験者実験を通して検討することを目的として研究することとした。

<方法>

1. 実験環境

採光や他の照明の影響を排除するため、学内の無窓の倉庫を実験室として使用した。高さ70cm、幅75cm、奥行45cmの学習機の周囲3面に床からの高さが120cmのパーティションを設置した。3000K・4500K・6500Kの3段階に色温度が調整可能なLEDデスクライトを作業時の机上面照度が500lxになるように調整して設置した。

2. 実験概要

被験者は、研究への同意を得た大学生男女14名(20~22歳)で、タイムスケジュール(図1)にそって実験を行った。実験期間は、2019年11~12月である。

- ・作業課題：経済問題10問、漢字10問、意味問題5問 計25問
- ・作業成績：課題を解く(ベース)。次に答え合わせと暗記を15分間でを行い、再度その場で課題を解いてもらう(即時記憶)。1週間後に同じ課題を解いてもらい、記憶の定着度をみる(長期記憶)。実験条件・課題内容の組み合わせはランダムに実施した。
- ・自覚症しらべ：主観的疲労感の目安(I~V群:5段階25項目)
- ・覚醒度：フリッカー値
- ・負担度調査表：実施する課題に対する得意、不得意等(7項目7段階)

自覚症調べ記入	フリッカー測定	課題1回目 (ベース)	答え合わせ 暗記	課題2回目 (即時記憶)	自覚症調べ記入 負担度記入	フリッカー測定	1週間後	課題3回目 (長期記憶)
4分	10分	15分	10分	6分				10分

図1 実験のタイムスケジュール

<まとめ>

自覚症しらべの結果では、II群の不安定感やV群のぼやけ感において、色温度の高い6500Kの条件のスコアが他の条件より減少傾向にあった。負担度調査においては、課題の困難さに対する評価に差はみられないが、「面白かった」と「集中した」の評価は、3000K<4500K<6500Kの順に高くなる傾向があった。よって、主観的な疲労感や負担感の軽減、集中力の向上などに色温度の高い照明が寄与する可能性がうかがえた。

フリッカー値の変化をみると、3000Kの条件では作業後に値がわずかに低下していたが、4500Kと6500Kの条件では作業後の値が高く、覚醒レベルの上昇が確認され、既往研究において色温度の高い光が人の覚醒水準に影響することを支持する結果となった。

作業成績のうち、漢字については、即時記憶、長期記憶ともに3000K<4500K<6500Kの順に定着度が良好で、即時記憶と長期記憶の差を低下度として比較しても、3000K>4500K>6500Kの順に低くなり、色温度の高い照明の効果がうかがえた。被験者にとって学習経験のある身近な課題であったことが成績の傾向が顕著に現れた要因と考察した。一方、経済問題においては類似した傾向がみられたものの、選択問題としたため、問題の内容を理解した被験者と選択番号を暗記した被験者の混在が推察された。さらに、意味問題では難易度が高すぎたため、環境条件による成績や定着度に明確な差がみられない結果となった。被験者に適した課題内容や難易度設定の困難さとその重要性を再認識した。照明の色温度と記憶の定着度を明らかにするためには、多様な課題内容や学習時間を設定したさらなる検証を行う必要があると考える。

謝辞：

長期にわたる実験に快くご協力頂いた被験者の皆様へ感謝申し上げます。



住民の主体的な観光まちづくり活動の動向について

田口 功太郎 高橋 勇希 竹雅 亮平 清水ゼミ
Kotarou Taguchi Yuki Takahashi Ryohei Takemasa

<本研究の目的>

近年、日本に訪れる外国人観光客が増加し観光構造が変化している。観光は日本経済を支える重要な産業であり、変革に対応した観光まちづくりが求められている。一方で、観光客の増加に伴い、観光地に及ぼす「オーバーツーリズム(以下OT)」^{注1)}が世界的な課題となっている。

本研究では、特にOTが深刻化を増している、観光地と居住地が重なりを見せる地域に着目し、深刻なOTに陥る前の状況を把握することにより今後のOT対策の示唆を得ることを目的とする。

<方法>

本研究では、檀原市の代表的な観光地の一つである「今井町」^{注2)}に着目し、下記の方法で調査を実施した。

- ①OTの実態を把握するため文献調査を行い、OTの発生メカニズムと要因について整理した。
- ②「今井町」の現状を知るために自治体や住民へのヒアリング調査を行った。
- ③OT初期の状況を把握するため、OTについて整理したものの中から、必要な項目について文献・ヒアリング・アンケートによる複数の調査を実施し、考えられる今後の課題をまとめた。

<まとめ>

まず、20項目にまとめたOTの発生要因のうち、住民の生活に深いかかわりを持ち、かつ、初期に起こりうる可能性の高い1、観光客によるゴミの増加、2、日常的に利用する施設等の衰退、3地域コミュニティの希薄化、の三点に着目し調査を実施した。

1. 観光客によるゴミの増加

およそ2ヶ月間に渡り、毎週1回、「今井町」内の全ての通路のゴミ拾いを実施した。ゴミが多く見られたのは「今井町」の外周部分や家と家の間の路地で、観光客の往来が多く、周辺には駐車場や公園、飲食店、事業所など住居が少

ない場所であった。

2. 日常的に利用する施設等の衰退

地域住民向けの施設と地場産業が年々衰退の傾向を迎える一方で、観光客向けの施設(カフェや飲食店、土産屋)は、年々、微増傾向が見られた。

以上のことから、「今井町」の生活関連施設の減少は、緩やかではあるが、進んでいることが分かった。

3. 地域コミュニティの希薄化

アンケート調査の結果から、自治会加入率が56%と低く、地域活動の周知度もさほど高くないことが明らかとなった。一方で、観光客を好意的に受け入れ、観光による地域の活性化を望んでいる傾向が見られた。

以上の結果から「今井町」は、緩やかに観光地化がすすんでおり、地域住民は、周辺地域に比べ高齢化率が高い「今井町」の賑わいを観光によって取り戻したいと願っていることがわかった。

本研究を通じ、我々は、高齢化が進み地域コミュニティが希薄化する中で、このまま今井町への観光客が増加した場合、他地域でみられるような深刻なOTに至るのではないかという懸念が生まれた。今後は、OT初期に、いかにして地域住民の生活と観光との共存を地域住民同士で考える機会を創出するか考えたい。

注1):

OTの定義を観光庁は、「観光地やその観光地に暮らす住民の生活の質、及び/或いは訪れる旅行者の体験の質に対して、慣行が過度の与えるネガティブな影響」としており、本研究においてもこれを踏襲する。

注2):

檀原市の観光客は急速に増加している。さらに、昨年度の「今井町」に新たに开店した店主」への調査では、半数以上が、今井町に开店を検討する前に、一度京都での开店を検討している。

ご協力いただいた自治会長米川様をはじめとする今井町保存地区内にお住いの皆様から感謝申し上げます。



地方中核都市における 小さな拠点づくりに関する研究

塚本 凌介
Ryosuke Tsukamoto

徳久 直人
Naoto Tokuhisa

清水ゼミ

<研究の目的>

近年、都市部ではコミュニケーションの希薄化による「都市における孤立」の問題が深刻さを増している。解決手段の一つとして「小さな拠点づくり」（以下：「拠点づくり」）がある。都市部における「拠点づくり」とは、まちの中に居場所をつくることで新たな地域コミュニティの創出を目指すものである。「拠点づくり」にはソーシャルキャピタル（以下S.C.）^{注1)}の関わりが大きい。

本研究では、ロバート・D・パットナム（以下：パットナム）のS.C.の概念を元に、大和高田市の市民主体のまちづくり団体「まち部」が実施する「小さな拠点づくり」を事例に活動を「見える化」することで、活動内で良好な要素と不足している要素を明らかにする。

<研究方法>

・大和高田市における「小さな拠点づくり」の一つである「ピアノプロジェクト」をまとめ直し、活動に参加しながら、パットナムのS.C.理論を元に分析した。

<まとめ>

大和高田市を元気にするために主体的に活動しているまち部が、ストリートピアノプロジェクトを行っている。この活動を、パットナムのS.C.概念に基づいて、「つながり」^{注2)}、「行動」^{注3)}、「信頼」^{注4)}の三者の係りに着目し、活動がどこに作用し、どこが不足しているのかを確認する。

本研究から、以下の点が明らかになった。

本研究では、大和高田市の「小さな拠点づくり」をパットナムのS.C.概念に基づき「見える化」した。今回の大和高田市における「小さな拠点づくり」は、ユウガタライブやピアノイベ

ントなどの比較的参加しやすい音楽活動が中心であった。そのため、「つながり」の形成はしやすく、実際にイベントの運営やピアノイベントに参加する「行動」にも移りやすいことが明らかとなった。

一方、「信頼」の獲得は他の2要素と比べると、各活動を行う上で判断しづらいことが明らかとなった。また、アンケート調査を実施した活動からは、演奏者も見学者もイベントのリピート率が非常に低いことが分かった。これにより、「信頼」は判断しづらく、獲得も難しい事が明らかとなった。

今後はS.C.の循環を更に良くするために、いかに判断し「信頼」を獲得させるかが課題である。

注釈:

1) S.C.とは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることができる、社会組織の特徴である。

2) 単なる地域住民などの人と人とのつながりだけでなく、組織と組織のつながり、組織と人とのつながりなど様々な関わりを示す。このつながりは、S.C.のサイクルを回す第一義的な役割を持っており、行動や信頼の蓄積に向けて貢献する。

3) 地域の課題に対して動くことである。行動には主体的である方が望ましいが、客体的の場合もある。これはつながりと信頼に相互作用し合い、特に信頼の形成には強く結びつく傾向がある。

4) 人と人や組織間などで信頼し合うことである。つながりや行動、またはその両方が相互作用しあうことにより生まれるものであり、人々や組織がお互いに信頼し合うことでつながりや行動の強化にもつながる。

謝辞:

本研究に際し、まち部の皆様、大和高田市小鷹様、末吉楽器店様、つばみ認定こども園の皆様、高田商業高等学校の皆様には多大なご協力を頂きありがとうございました。



色彩表現を用いたピクトグラムに関する研究 -東京 2020 オリンピックを例として-

寺田 真奈
Mana Terada

松岡 聖奈
Seina Matsuoka

李ゼミ

<研究目的>

ピクトグラムは、視覚記号の一つであり、非常口やトイレの目印に代表されるように、文字がなく、目につきやすい無駄のない図記号で表されている。日本では、1964年(昭和39)のオリンピック東京大会をきっかけに公共施設に導入された。この時のスポーツピクトグラムは、モノクロ表現であったが、東京2020オリンピックでは、大会ブランドの一貫性を大切にするため、日本の伝統色である藍色で粋な日本らしさを表現するエンブレムブルーを基本カラーとしている。しかし、藍色一色の基本カラーでは、各競技からイメージされる色は異なり、わかりやすさという面では、不十分であると考えられる。

本研究では、各競技のイメージに合う色をピクトグラムに採用することで、より正確に情報が得られると仮定し、フレームタイプを用いて、それぞれの競技の情報がより伝達されやすい、すなわち、競技をイメージしやすいピクトグラムの地色について検討し、提案することを目的とした。

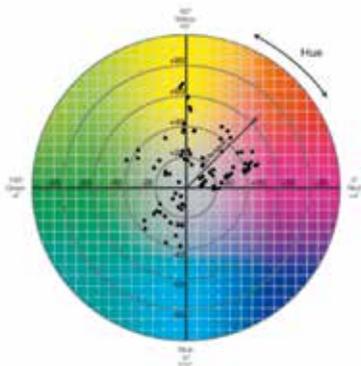


図1 a*b*色度図における画像試料分布

<方法>

それぞれの競技からイメージされる色を既存のスポーツピクトグラムの地色に反映させイメージしやすいピクトグラムを作成し、10代~70代を対象に、SD法により、評価してもらった。

<まとめ>

スポーツピクトグラムの地色には、各競技からイメージされる色かつ図と組み合わせた際、明度差のある鮮やかな色、すなわち、ビットトーンが適していると考えられる。また、イメージされる色として、暖色系が多いといえる。これは、日本代表のユニフォームで赤色が多く採用され、キャッチフレーズの「火の鳥」「暁」などからも連想できることから、日本人にとって赤色は、スポーツのイメージに繋がりがやすいのではないかと考える。一方で、寒色系が選ばれた水泳やサッカーには、水やサムライブルーというイメージが重視されたといえる。つまり、競技に対する共通の色彩イメージがあることが明らかとなった。それらをスポーツピクトグラムの地色に採用するという事は、日本人に対して情報伝達の向上に効果があるといえる。



図2 提案するピクトグラムにおける色彩表現

今後の課題として、オリンピックが世界中の人に向けたイベントであることから、日本人のみならず外国人を対象とした実験などを行い、世界共通のピクトグラムを提案する。



インターネットショッピングにおける商品の色名に関する研究 —トップスを中心に—

土井 絵梨華
Erika Doi

松井 梓
Azusa Matsui

季ゼミ

<研究目的>

インターネットショッピングサイトで展開されている商品、特に衣類に多く用いられている外来語の形容詞の修飾語「ライト」「ディープ」「ダーク」「ブライト」の表現に着目し、ユーザーがどのように色を判別しているのかについて明らかにすることを目的とした。

<方法>

流通チャネルAmazon・ZOZOTOWN・楽天の中でも特に衣類でよく扱われている7色と、4つの形容詞の修飾語を組み合わせた合計24色のトップスをそれぞれ検索し、1つの色名につき各32枚ずつ画像を選定し試料①とした。また、試料①からかたちを除いて制作した試料②を用い、大学生を被験者とし検討を行った。それぞれ「各色名と一致しないと感じるもの」を5つまで評価してもらった選択法を行い、特に色度図における広がりのみられた16色に注目し検討を行った。



図2 トップスを中心とした画像試料の一例(試料①)



図3 かたちを排除した画像試料の一例(試料②)

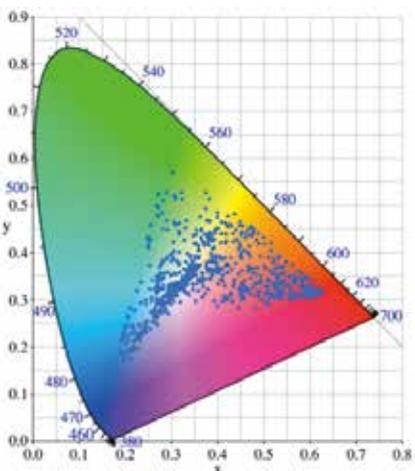


図4 xy色度図における画像試料分布(768全試料)

<まとめ>

- 1) 女性のほうが男性よりも色を認識する範囲が狭く、評価の共通性がみられた。男性では試料①、女性では試料②のほうで評価の共通性がみられ、男性は女性よりかたちに影響されやすい傾向がある。
- 2) 被験者は色を判別する際に色だけの画像よりもかたちのある画像のほうで総合的な判断となり、イメージしやすい。
- 3) ネットショッピングの利用率が高い若者では色名からのイメージが一致しやすい。
- 4) 緑系の色では試料①と試料②共に最も評価されにくい色であった。それはマクアダム楕円(緑系は色差が大きくなければ見分けられない)によるものと、中間色のためイメージしにくい色であることが一因として考えられる。
- 5) 評価の共通性が最も見られた色は赤系であることから、赤系の色は最もイメージしやすい色である。



大学生のトップスとボトムスを中心とした装いの配色評価に関する研究

西田 茉央
Mao Nishida

李ゼミ

<研究目的>

近年、ファッションとは「ライフスタイル全般を包括するもの」として考えられている。衣服だけでなく、生活空間、インテリア、食、アクセサリーなどの自分自身のすぐそばに存在する「モノ」のほかに、その「モノ」を選択するまでの過程や考えまでもが「ファッション」というカテゴリーに加わるようになった。その中でも衣服は、「ファッション」を代表するものであり、SNSが社会に定着しつつある今、10代・20代の世代はSNSが各個人と一体ともいえる媒体となっているため、「ファッション」の流行に敏感であると考えられる。そのような世代が「ファッション」によって自己満足感を得て、他者からの自分の印象向上を図ることを目的とした、オシャレへの関心が高まっていることをふまえて、衣服の中でも人の心理に影響を与える要素の一つの配色を軸に、本研究では、近年SNSなどの情報を活用していると考えられる10代、20代、とりわけ、大学生を対象として夏・秋のトップスとボトムスの配色のみに対する評価による検討を行った。

<方法>

- ①夏と秋の男と女、それぞれの自己評価(高評価と低評価)の画像からトップスとボトムスを中心とした加工画像試料を作成し、色彩輝度計によりベースカラーを測定した。
- ②19対語の感情尺度を用い、SD法により-2から+2までの5段階尺度でイメージ評価を行った。
- ③それぞれの画像の配色に対して、評価を0点から10点までで評価してもらった。
- ④夏・秋の加工画像試料から生じる心理因子を抽出し、主因子法による因子分析を行った。



図1 男女学生の加工画像試料と自己評価点数(夏調査)



図2 男女学生の加工画像試料と自己評価点数(秋調査)

<まとめ>

- 1) 衣服に対し高消費者であるほど装いに対する意識が高く、自己満足感の高い装いにつながると考えられる。
- 2) 装いに対する評価は、「嫌いー好き」、「着たくないー着たい」による影響が大きい。因子分析の結果から「好み」に対し、配色色相の明度や彩度の色相の好み、自分自身が着用したイメージを主観的かつ客観的に想像し、その中から、自分自身の嗜好尺度と一致するかどうかを判断し、評価の要因となっている。
- 3) 無彩色を使用している装いが自己、他者ともに高評価となった。一方、柄物、秋調査に関しては、季節にそぐわない色相を使用している配色の装いが低評価になる傾向がある。このことから、夏秋共にシンプルで無彩色をベースとした配色の装いと、季節感が一致する色相を使用した装いが好まれると考えられる。



小学校高学年の放課後の居場所と保護者の認識の違いについての研究 —真美ヶ丘第一小学校を事例として—

長谷川 真暉
Masaki Hasegawa

清水ゼミ

<研究の目的>

子供にとって外で遊ぶことは運動能力やコミュニケーション能力の向上のために欠かせない。一方で近年、犯罪や交通事故によって子供が被害者となる事件が後を絶たない。犯罪や交通事故が多い環境では、保護者が子供の遊び場を規制する傾向があると言われており、放課後の安全安心な子供の居場所づくりの整備が求められている。広陵町立真美ヶ丘第一小学校区では、真美一まちづくり連絡会を発足させ、小学生が安全安心に暮らせるような取り組みを行っている。

本研究では、真美ヶ丘第一小学校区をフィールドとして、下記の3点を明らかにすることで、小学生の安心安全な放課後の居場所を親と地域で守るための示唆を得る。

- ①小学生の放課後の過ごし方を把握する
- ②親が思う我が子の放課後の過ごし方を把握し、小学生の実態と比較する
- ③小学生と保護者とまちづくり連絡会のそれぞれ取り組むべき課題

<方法>

真美一まちづくり連絡会(以下連絡会)は、代表の東秀行さん、事務局の岩崎恒夫さんをはじめ、各自治会の会長や真美ヶ丘第一小学校の関係者、PTAなどで構成されている。連絡会の協力のもと、下記のアンケートを実施した。

調査対象	真美ヶ丘第一小学校 5年生、6年生
調査日	記入：2019年 11月9日(土)～11月15日(金)
調査方法	HRの時間帯に記入、もしくは自宅にて記入。 教員が回収。
有効回答数	118 / 132 (回収率 89%)
主な質問事項	A：あなた自身のことについて B：あなたの遊び場について C：放課後の安心安全について
調査対象	真美ヶ丘第一小学校 5年生、6年生の保護者
調査日	記入：2019年 11月9日(土)～11月15日(金)
調査方法	小学生を対象を持ち帰ってもらい、自宅にて記入。 教員が回収。
有効回答数	102 / 128 (回収率 80%)
主な質問事項	A：あなた自身が思うお子様のことについて B：お子様の遊び場について C：お子様の放課後の安心安全について

<まとめ>

- ①遊び場について
約4割の小学生が「毎日校区外へ行ってい

る」、「時々校区外へ行く」に該当すると回答しているのに対し、保護者の回答は約2割にとどまった。2割の保護者は我が子の校区外への行動範囲を正確に把握できていないことが明らかとなった。

②地域との関わり

小学生の登下校時に「挨拶をしている」、「どちらかという挨拶をしている」の該当者は約5割、保護者は約2割にとどまった。保護者が思っているよりも小学生が登下校時に挨拶を通じて地域との関わりをもっていることが明らかとなった。

③事件、事故に遭遇した時の対応

保護者は我が子が自宅に帰って家族に知らせると回答した傾向が多かったのに対し、小学生は近くの家やお店に行って知らせるという回答が多くみられた。小学校では、何かあった時は、近くの大人に助けを求めるように指導している。そのため、地域に助けを求める傾向が強いことが明らかとなった。

④危険箇所の把握

保護者より小学生の方が危険と感じている場所が少ないことが明らかとなった。

以上の結果から、小学生と保護者の認識の違いがあることが明らかとなった。これらの認識の違いを把握したうえで、地域住民がどのように小学生の放課後の居場所を守っていくべきか検討することは重要である。当該小学生は、保護者が想像するよりも地域に関わろうという意識が高いことから、地域住民と小学生がお互いを知る機会をより多く設けることで、放課後の安心安全な居場所作りにつなげることができるのではないかと考える。また、地域住民と小学生が関わることで、小学生を通じた親と地域の関わりが増加することも想像出来る。

今後は、本研究結果を生かして、地域住民が小学生の放課後の居場所作りにもどのように関与できるか検討したい。

謝辞：

ご協力頂いた真美ヶ丘第一小学校の小学5、6年生と保護者の皆様、真美一まちづくり連絡会の皆様に厚く感謝申し上げます。



休憩の取り方が作業負担や成績に与える影響

吉田 浩樹
Hiroki Yoshida

東ゼミ

<目的>

短時間の睡眠は脳の働きを回復させ、生産性を高める効果があるといわれ、近年、休憩として昼寝を制度として取り入れる企業の増加が報告されている。

作業負担には様々な種類があり、負担に対して人が感じる負担は必ずしも比例せず、負担の感じ方には個人差がある。これには、個人のスキルだけでなく、休憩の取り方の影響も大きいと考えられる。そこで本研究では、作業負担と休憩の種類を組み合わせた条件において被験者実験を行い、作業成績および負担度、疲労感、覚醒度等の測定を通して休憩の効果を考察することを目的とする。

<方法>

被験者は研究協力への同意を得た大学生12名(男性6名、女性6名)で、休憩と作業負担を組み合わせた以下の4条件を学習効果に考慮してランダムに実施してもらい、作業前後に主観的疲労感や覚醒度等、作業後に困難度や負担度をたずねた(図1)。実験期間は2019年11月~12月である。

・休憩：2種類

- ①昼寝：机上でうつ伏せになり目を閉じる(10分間)
- ②場面転換：学内を歩く(10分間)

・作業負担：2種類

- ①計算作業：2桁の数を7で割った余りの数を算出(15分間)
- ②創作作業：160ピースのジグソーパズル制作(45分間)

・測定項目

作業成績：計算作業の正答数・誤答数

創作作業の完成率

自覚症しらべ：主観的疲労感の目安

(I~V群：5段階25項目)

覚醒度：フリッカー値

困難度調査：VAS法

負担度調査：14項目(6段階)

条件Ⅰ	フリッカー値	計算作業(15分)	基礎(90分)	計算作業(15分)	負担度調査	フリッカー値
条件Ⅱ	フリッカー値	場面転換(10分)	場面転換(10分)	計算作業(15分)	負担度調査	フリッカー値
条件Ⅲ	フリッカー値	フリッカー値	基礎(90分)	創作作業(45分)	負担度調査	フリッカー値
条件Ⅳ	フリッカー値	場面転換(10分)	場面転換(10分)	創作作業(45分)	負担度調査	フリッカー値

図1 実験のタイムスケジュール

<まとめ>

今回の作業負担のうち、計算作業は短時間の集中力を要する作業であり、一方、創作作業のジグソーパズルは長時間の単調な作業であった。

作業成績の平均値は、作業負担の種類によらず、昼寝条件において成績が良い傾向がみられ、近年の昼寝制度導入の効果を支持する結果となった。創作作業では完成率が上昇し、計算作業においては誤答数の減少が確認された。

覚醒度の目安としたフリッカー値の結果では、創作作業は休憩の種類に関わらず作業後に覚醒傾向がみられたが、計算作業では場面転換条件で覚醒度がやや低下し、作業内容による違いがあった。

主観的疲労感として自覚症しらべの結果をみると、計算作業の昼寝条件は場面転換条件に比べてIV群(だるさ感)の点数が低かった。また、作業困難度においても、計算作業時は昼寝条件においてやや軽減される傾向にあった。負担度の合計点で比較すると、計算作業では休憩の種類による差はなかったが、創作作業においては場面転換条件が昼寝条件よりやや低い結果であった。

以上の結果より両作業ともに作業成績では昼寝の効果が確認されたが、困難度や負担感の軽減という心理的効果でみると、短時間の集中作業には昼寝が、長時間の単調作業には、飽きや眠気の軽減につながる場面転換が効果的と考えられた。

謝辞：

長期に渡る実験に快くご協力頂いた被験者の皆様に感謝申し上げます。

制作風景



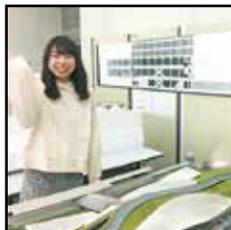
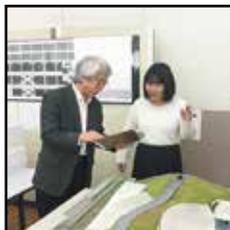


第14回 卒業研究講評会

全体発表会 2020年1月11日 9:30~17:00

選抜発表会 2020年1月21日 13:00~17:00

会場:畿央大学KB04教室



選抜発表者

川口 華奈 菅野 真奈 中屋 菜月 西垣 明花 丹羽 美沙希
長谷川 尚史 藤原 大輔 宮本 亜香里 森本 美里 山下 和也
以上 10名 10グループ



第14回 卒業研究講評会

学長賞 森本 美里

優秀賞 菅野 真奈 宮本 亜香里

以上3名3グループ





講評

人間環境デザイン学科の選抜講評会に参加しました。本学科では、幼児から高齢者、障がい者まですべての人にやさしく、使いやすいものづくりの基本「ユニバーサルデザイン」をテーマに、健康で心豊かに生活できる環境を創造する知識と技術の修得に取り組まれています。今回の講評会でも、「建築・まちづくりコース」、「インテリアデザインコース」、「アパレル・造形コース」の各分野から、選りすぐられた様々な作品が提示されました。街並みや独創的な建築物の設計、駅舎のデザイン、絵本やガラス細工の製作、新たな材質や染料を用いた布地の開発、装飾を凝らした被服の制作など、それぞれのテーマで各自が独自のアイデアをもって工夫された様子が、制作物やプレゼンスライドを通じて伝わってきました。卒業制作は文字通り本学科で学んだことの集大成です。自らのアイデアを具体化するために、各地の町家を訪問したり、織物、染料の産地へ足を運び、地元の人々と触れ合いながら実際の制作過程を体験するなど、地道な活動を詳細にご報告頂き、大変興味深く拝聴しました。このような、グループワークやフィールドワーク、卒業研究ゼミなどを通して、異なる価値観に触れ、協力しながら創り上げる面白さを実感することで、社会や現場で求められる協調性やコミュニケーション力が磨かれるものと思います。

住まい、インテリア、アパレルの各分野における総合的な造形教育を通じて、本学の建学の精神の一つである「美をつくる」を身を持って体現しているのが、人間環境デザイン学科の方々であると思います。今後ともより一層創造的思考を働かせて新たな文化を創造し、社会に貢献して頂くことを期待してやみません。

最後に、卒業までの間、親身にご指導頂いた先生方に感謝申し上げるとともに、今後とも卒業生を温かく見守って頂くことをお願いしまして講評とさせていただきます。

健康科学部 学部長
植田 政嗣

これで、君たちの大学4年間の学びは終わった。

君たちは、卒業研究や卒業制作に全力を注ぐことができただろうか。大学で勉強したことの集大成として、納得のいく成果物が得られたであろうか。

先生たちから認められたから納得できるということでは決していない。それは、自分の心の内で決めることだ。

君たちの多くは不完全燃焼のまま、納得できてはいないのではないかと思う。「先生はどう思うだろうか。」と評価を気にしすぎて、先生の指示や判断を待ってはいなかっただろうか。自分の心で、自分の考えで判断してきただろうか。他人の目を気にして、「私だったら、このくらいでいい。」とあきらめ、自分で自分の限界を決めてしまっていただろうか。

君たちの力は、こんなものではない。心を自由にして、自分の可能性を信じて、胸を張ってほしい。

君たちに、エピクテトス (Epictetos ギリシャ人、古代ローマ時代に生きたストア派の哲学者) の言葉を贈る。

心を自由にして生きる唯一の道は「自分ではどうすることもできないもの」を軽く見ることである。無知だとか、愚かだとか思われても、それに甘んじていなさい。君ができること、まさにそのことに君は励めばよい。

君たちの可能性を私たち教員は信じている。

人間環境デザイン学科 学科長
三井田 康記

畿央大学 健康科学部
人間環境デザイン学科 教員

教授

学部長 植田 政嗣
学科長 三井田 康記
主任 東 実千代
西山 紀子
藤井 豊史

准教授

加藤 信喜
村田 浩子
李 沅貞

助教

清水 裕子
陳 建中

助手

中井 千織

編集委員

陳 建中
中井 千織

浅田 明香
猪野 紗也華

齋宮 ひなの

上田 琴乃

奥村 綾

北原 亨

小西 里久

櫻井 香月

三步 莉奈

嶋崎 勇之介

巽 健一

辻野 皓

西本 和人

松下 茉由

森田 百香

追田 奈菜

大久保 萌恵

大隈 天斗

岡本 萌樺

佐々木 りか

清水 淑加

周藤 希実

中島 稜

原田 葵

廣原 雅大

山田 向日葵

以上

「卒業制作・論文作品集」14

2020年3月13日発行

発行 畿央大学

健康科学部 人間環境デザイン学科

代表 学長 冬木 正彦

〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

印刷 株式会社 明新社